



ミスティックルーイン テイルスの工房

自分のマスターである夏菊と別れ、また普段の生活に戻ってきたストレンジャー達。作り出されたオリキャラである皆は、またいつもの生活へと戻って行った。しばらくして、ストレンジャーは暇を貰うと、早速、テイルスの所へ遊びに行ったのであった。

コンコンッ

「はい。」

工房の扉がノックされ、部屋にいたテイルスは扉の元へ行き、ドアを開けた。テイルスがドアを開けると、外にはストレンジャーが立っていた。

「ようテイルス。 ただいま。」

「お帰り！ スtrenジャー もう用事は済んだの？」

テイルスはストレンジャーに出迎えの挨拶をし、出かけていた理由を問いかけた。

「ああ、すべて終わったぜ。 これで俺達もマスターも一安心、って所だな。」

「お疲れ様。 あ、ここじゃなんだから、上がって上がって。」

「お邪魔するぜ。」

テイルスは玄関で喋っていた事を思い出し、ストレンジャーを部屋へ入れた。ストレンジャーはその誘いに乗り、部屋へと入って行った。

「今、飲み物用意するから。」

テイルスはストレンジャーをソファに腰掛けた後、飲み物の用意をしようとした。

「あ、いいよ。 自分でやるから。」

「いいのいいの。 ストレンジャーはお客様なんだから。 待っててね。」

テイルスの行動にストレンジャーはソファから立ち上がったが、テイルスはそんなストレンジャーを止め、再びソファに座らせた。

そんなテイルスを、ストレンジャーは笑顔で見ている。

しばらくして、テイルスはジュースの入ったグラスを持って戻ってきた。

「お待たせ。 ストレンジャーがいない間、自分で研究して作ったトロピカルジュースだよ。 ストレンジャーの好みに合うといいんだけど。」

「いただきます。」

ストレンジャーはテイルスからジュースを受け取り、飲んだ。

「お、美味いぜこのジュース！」

「よかったー。 ストレンジャーにそう言ってもらえると嬉しいよ。」

テイルスは笑顔でジュースの感想を言ってくれたストレンジャーを見て、嬉しそうに言った。そしてテイルスはグラスを片手に、近くのソファに座った。

「出かけてた間、どんな旅をしたの？」

テイルスはジュースを飲みつつ、ストレンジャーに問いかけた。

「ああ、テイルスにはまだ言ってなかったな。 実はあの時あったラブソディだけど、あれは俺達のマスター、神様だったんだ。」

「神様？」

「そうだ。 俺達の存在を作ってくれた生みの親だったんだ。 テイルスにも、俺達とは違うマスターがいるんだぜ。」

「ビックリだよ。 自分にそんな人がいたなんて。」

「俺も最初は信じられなかったぜ。自分の目の前に、まさか神様がいるんだからな。」

ストレンジャーはラブソディと会った時の事を話し、今までのあらすじを語り、今回の旅の内容を語った。

自分のマスターが記憶を失い、自分のこの姿が消えかけていた事。
本来の姿を失い、世界にさまよっている哀れな存在、迷人の存在。
名前の力を失い、自分が弱くなってしまった事。

そして、新たに出会ったマスターの友人に、新しい仲間達との楽しい日々。
大変だったが、自分が出来る限りの事をし、マスターが去って行ったことを。

「そんな感じで、今回の旅が終わったんだ。」
「結構大変な旅だったんだね。でも名前の力を失って弱くなったストレンジャーなんて、想像できないね。」

テイルスはストレンジャーからの旅の内容を聞き、1つの話を思い出して考えていた。

「俺もあの時の不安感は恐ろしかったな。全身が震えてたからな。」
「でもストレンジャーの名前に意味があったなんて知らなかったね。ストレンジャーは知ってたの？」

「いいや。俺も母さんからちょっと聞いたくらいだからな。あの時は『強さを示す意味、心の強さを示す意味。』って言ってたな。」

「心の、強さ。」

「だが後でラブソディに聞いたら、『存在自体の真実の強さ、心の強さの意味を込めた存在』って言ってたぜ。」

ストレンジャーは、後ほどラブソディから聞いた名前の由来を説明した。

「カッコいい名前の由来だね！ストレンジャーにぴったりだよ。」

「そうか？ありがとうテイルス。」

テイルスはストレンジャーの名前の由来を聞き、嬉しそうに褒めた。

ストレンジャーはテイルスから褒められ、少々照れていた。

「その名前の意味を失ったから、俺に強さが無くなったんだな。」

「そんなにかっこいい由来が無くなったら、確かに不安になっちゃうね。」

「そういう事だな。」

ストレンジャーは話をひとまず終え、ジュースを飲んだ。

「そういえばストレンジャー。新しい人って、名前なんて言うの？」

「ああ、チェリーにホープにホネスティ、プレスルにティザー。それとプロミスとブラベリーだ。」

「随分とたくさんお友達が出来たんだね。」

テイルスは新しく聞く名前を聞き、どんな人たちなのか考えていた。

「プロミスとブラベリー以外の人達は、今はテトラクリスタルアイランドの近くに、新しく城を作ってるぜ。前に住んでいた城、ビーイングキャッスルが無くなっちゃったからな。」

「他の2人は？」

「ちょっと今は旅に出てて消息不明だな。でもそのうち帰ってくるよ。」

「そっか。」

テイルスは皆の行動を聞き、ジュースを飲んだ。

「そうだ。ラプソディが今、テトラクリスタルアイランドの近くのミドルガーデンで店を開いてるんだ。良かったら行かないか？」

「お店？ 何のお店なの？」

「カフェだ。マスターのなりたかった職業なんだって楽しそうに言ってたぜ。」

ストレンジャーはそのときのラプソディを思い出し、テイルスに言った。

「そうなんだ。僕も行ってみたいな。」

「じゃあ今から行ってみようか。」

ストレンジャーとテイルスは話しがまとまり、テトラクリスタルアイランド周辺のミドルガーデンへ出かけて行った。

再会友

ミドルガーデン ラプソディのカフェ『Middle Garden』

ストレンジャーがワープゾーンを開き、2人はラプソディの経営するカフェへやってきた。

「ここだぜ。 テイルス。」

ストレンジャーは近くにある店を指差し、テイルスに言った。

外見は茶色の木造建築。

二階は無く、少々大きめなカフェだった。

看板には『Middle Garden』と書いてあった。

「結構大きめなつくりなんだね。 どんなお店なんだろう？」

「早速行って見ようぜ。」

ストレンジャーはテイルスと共に、店内へ入って行った。

リリリン♪

「いらっしゃいませー」

ドアベルの音が聞こえ、店内にいたラプソディはお決まりの挨拶をして扉を見た。

店の営業と言うこともあり、いつものスタイルにシャツを着ていた。

「あ、ストレンジャー君！ テイルスさん！ いらっしゃい！」

ラプソディは2人の姿を見ると、嬉しそうに言った。

「こんにちは、ラプソディ。」

「随分と繁盛してるみたいだな。」

ストレンジャーは店内の様子を見つつ、ラプソディに言った。

「うん！　ここは自分の作り出した世界だから、好きなお客様がいっぱい来てくれるんだ。　おかげさまで自分まで嬉しくなっちゃうよー」

ラプソディからの営業状況を聞きつつ、二人はカウンター席に着いた。

「えっと、お客様方、ご注文は何になさいますか？」

ラプソディは2人を見つつ、とりあえず注文を聞いた。

「特に無いから、マスターのセレクトで頼むよ。」

「僕もストレンジャーと同じでいいかな？」

「わかりました。　では少々お待ちくださいね。」

ラプソディは2人にお辞儀をし、おもてなしの用意をした。

「それにしても、随分と賑わってるねー」

テイルスはカウンター席の後ろの各席を見つつ、ストレンジャーに言った。

お客様は人や獣など、さまざまな人種の方々がカフェでくつろいでいた。

でもテイルスには見かけたことのある人はおらず、見た後前に振り返った。

「でもマスターに取っては好きなキャラクターは全員、お得意様見たいなもんだから、名前が全員わかるんじゃないかな。」

「そうだね。　後で聞いてみよっか。」

「お待たせしましたー」

2人が会話をしていると、ラプソディがトレーをもってカウンターに戻ってきた。

「ハーブティと気まぐれフルーツタルトをお持ちしました。　どうぞー」

ラプソディはテイルスとストレンジャーの前に、ケーキと紅茶を置いた。

「うーん、いい香り。 何のハーブティなんだ？」

ストレンジャーはハーブティの香りをかぎつつ、ラブソディに問いかけた。

「えっと、今日のはカモミールだよ。 おいしいよー」

ラブソディがそう言うと、二人はハーブティを飲んだ。

「うわぁ、不思議な味！」

「でも美味しいな。 ちょっと研究したのか？」

「うん。 気に入ってもらえてよかった。 ケーキも食べてみて。 ストレンジャー君の好物のドラゴンフルーツだよ。」

ラブソディは2人の感想を聞きつつ、2人にケーキを進めた。

ケーキは下の生地の上に、フルーツを凝縮したタルトになっていた。

色は紫のため、少々なんともいえない。

「うん！ こっちも美味しいよ！」

「本当だ美味しい！ 俺の好物を入れてくれるなんてな。 さすが俺のマスターだな。」

ストレンジャーはタルトを食べつつ、ラブソディに言った。

「皆の好物は把握してるからね。 そこは抜かりないよ☆」

ラブソディは2人にグットサインをしつつ言った。

2人はそのまま、タルトとハーブティの味を楽しんだ。

リリリン♪

「あ、いらっしゃいませー」

ラブソディはドアベルの音に反応し、お客様にご挨拶をした。

「ようストレンジャー、テイルス。 久しぶりだな。」

「こんにちは、皆さん。」

「あ！ フォックスにピーチ姫！」

やってきたのは、フォックスとピーチ姫だった。

「フォッ君に姫様、いらっしやいませ。 お席はあちらでよろしいですか？」

ラプソディは2人の元へ行き、席を案内した。

「ああ、もちろんだぜ。」

「わざわざ席を用意してもらってすみません。」

「いえいえ、気にしないでください。」

ラプソディはそういって、2人をカフェの裏のテラスへ誘導して行った。

「あ、テイルスとストレンジャーも俺達と一服しないか？」

フォックスはふと思い、二人にお茶を誘った。

「いいの？ フォックス、ピーチ姫。」

「もちろんです。 どうぞ。」

「ありがとうございます。」

テイルス達は了解し、フォックス達の後を付いて行った。

そこはカフェの裏手で、森の一角を綺麗に作り変えた庭園だった。

「うわあ！ カフェの裏にこんな場所があったんだね。」

テイルスは庭園を見つつ、はしゃいでいた。

「ええ、こちらは予約したお客様や、大切なお客様がいらした時のための場所なんです。 ど

うぞ。」

ラプソディはテイルスに説明しつつ、中央のテーブルへ招待した。
4人は席に付いた。

「お客様方、ご注文は？」

ラプソディは4人が席に着いたことを確認し、注文を聞いた。

「マスターのセレクトで頼むぜ。」

「私もそれで。 テイルスさん達は？」

「僕達はさっき食べたから、ドリンクだけお願いします。」

「俺も。」

「かしこまりました。 少々お待ちくださいませ。」

ラプソディは4人に礼をし、下がった。

「そういえばフォックス。 なんでピーチ姫といっしょだったの？」

テイルスは変わった組み合わせだった2人を見つつ、フォックスに問いかけた。

「ああ、ちょっと今回の試合でペアになったんだ。 それで休憩にここへ来たんだ。」

「このカフェ。 まだ出来て間もないんだけど有名なのよ。 特定のお客様はマスターのことを知らないのに、マスターはその人の名前や好みを把握してるらしくて、メニューがフレンドリーなの。」

フォックスとピーチ姫は、このカフェに付いて説明した。

「そんなに有名だったんだ。 ここ。」

「俺達以外の方々がここに来れるのは、多分マスターが何かしてるんだろ。」

ストレンジャーはこの不思議なカフェについて、推測した。

「でもビックリですね。 皆さんがこちらにいたなんて。」

「ああ、俺達や特定の人しか来れないのに。」

フォックスとピーチ姫は少々驚いたことについて、2人に言った。

「そうなの？ ますます不思議だね。」

テイルスは少々訳がわからなくなりつつ、二人に言った。

「お待たせしました。 ダージリンとピーチケーキになります。」

ラブソディはご注文の品をトレーに乗せて、4人の下へやってきた。
そして、注文の品をそれぞれの席に置いた。

「うわあ、おいしそうー」

「いただきまーす。」

フォックスとピーチ姫は喜びつつ、ケーキを食べた。

「うーん。 おいしいわー」

「ああ、結構甘いかと思ったが、そこまででもなかったんだな。」

「フォッ君のは甘さを控えめにしています。 ケーキの桃は、トロピカルアイランドの美味しい桃です。」

ラブソディは適度に説明し、楽しんでもらっていた。

「そういえばラブソディ。 1つ聞いてもいいかな。」

テイルスはふと、ラブソディに質問した。

「はい？ なんでしょうか？」

「ここのお店って、なんか仕掛けがあるのか？」

ストレンジャーがテイルスの変わりにいい、問いかけた。

「あら、もうわかつちやいましたか。 実は別次元の方々がいらしていただけるように、いろいろな場所に扉を構えているんです。 いらしていただくのは、ここミドルガーデンです。」

ラプソディは店のシステムを、簡単に4人に説明した。

「じゃあ、俺達が店に入ってこれたのは、その扉のせいなのか？」

「ええ、皆さんがお忙しい中、休憩としてご利用してもらえるようにしてあります。 若干有名になっているのは、そのせいでもありますね。」

「私達を知っているのは？」

「それは、当店の秘密になっております。 ごめんなさいね。」

ラプソディは人差し指を口の前に持って行き、フォックス達に言った。

「ま、美味しい料理をいただけるのはいいことだし、好みを知っていることもいいし。 別にいいけどな。」

「私達も、それだけ有名って事なのでしょうからね。」

2人は少々満足しつつ、ケーキを堪能した。

そんな不思議なカフェでの一時を終え、テイルスとストレンジャー以外のお客様は、次々と店を後にして行った。

ラブソディは本日の営業を終え、入り口に閉店の看板をかけた。

「うーん。 今日も疲れたー」

ラブソディは背中を伸ばしつつ、店の片付けに入った。

「お疲れ、マスター。」

「僕達も手伝うよ。」

テイルスは店の食器を片付け、シンクに置いた。

ストレンジャーは布巾を片手に、テーブルを拭いて回っていた。

「あ、ごめんなさい。 テイルスさん、ストレンジャー君。」

「いいのいいの、気にしないで。」

テイルスは笑顔でラブソディに言った。

ラブソディはそんな2人を見て、微笑んでいた。

それからしばらくし、3人は片付けが終了した。

「ありがとうございました。 テイルスさん、ストレンジャー君。」

「いいのいいの。 気にしないで。」

テイルスは笑顔でラブソディに言った。

「俺達も、美味しいものをタダで食べられただけで満足だからな。 これくらいいいって。」

ストレンジャーも同様に、ラブソディにそう言った。

「ありがとうございました。 おかげでお仕事がちょっと楽に片付きました。 またいらしてくださいね。」

「うん。 また遊びに来るね。」

「俺も、暇なときは仕事を手伝いにくるからな。」

「ありがとう、2人とも。」

ラブソディはそういいつつ、2人を外まで見送った。

「じゃあ俺はテイルスを送っていくから。」

「またね、ラブソディ。」

「はい、またのご来店を、お待ちしております。」

ラブソディは2人に礼をし見送った。

ストレンジャーとテイルスが外に出ると、外は夜だった。

「今日は楽しかったねー」

「ああ、少し時間が経っただけで皆の行動が変わるもんなんだな。」

ストレンジャーはワープゾーンを開きつつ、テイルスに言った。

「そういえば新しく来た、ホープ達だっけ？ 今は何処にいるの？」

「今は俺達の島と一緒に過ごしてるぜ。 グロウが手助けしつつ、元の城を島の近くに建てるんだと。 プレスルやティザーもその手伝いをしてる。」

「いなくなった人たちの分まで頑張ってるんだもんね。 この先、皆仲良く出来るのかな。」

「出来るさ。 マスターがその事を望んでいるから、皆がこの島に集まったんだと思うからな。」

ストレンジャーは島の近くから見える、テトラクリスタルアイランドを見つつ言った。

「よし、テイルス。 行こうぜ。」

「うん。」

ストレンジャーはワープゾーンを開き終え、テイルスと共にミスティックルーインへ向かって行った。

その後テイルスを送り終え、ストレンジャーはテトラクリスタルアイランドへ。

「ただいまー」

ストレンジャーは自分の家へ帰り、シャワーを浴びた後、ビリーブと共に自室へ戻って行った。

「お休みなさい。 ストレンジャーさん。」

「おやすみ、ビリーブ。」

2人はそれぞれ相手に言うと、目を瞑った。

『プロミスやブラベリー、今どこにいるのかな・・・』

ストレンジャーはふと、そんな事を考えつつ、寝てしまった。

— E N D —